
ゼ ガペイン i f もう一度あなたに逢いたい

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼーガペイン if もう一度あなたに逢いたい

【Nコード】

N7567P

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

ゼーガ最終回のその後です。

TV版はカミナギばっかだったので先輩もありだと思っただ

ゼーガペインをもとにした短編です。

ゼーガという作品を知らない方が多いので少しでも知ってもらいたいと思いききました。

(前書き)

B D I B O Xで監督がシズノとのエンドも案にはあったと聞いたので書いてみた。

本当はゼ ガという作品を知ってほしいだけなんですけど

最初、彼に再会した時心から嬉しかった。けど、逆に悲しくもあつた。

なぜなら、今いる彼は私の知っている彼ではないから。彼にとって私は“先輩”。

だから、彼が向けている思いは私ではない。

最初はそう思っていた。

最後の出撃。彼は原体に戻り私はもう彼に触れることは叶わなくなっていた。

そして、懇情の別れだとも思っていた。

けど、最後に彼はすべての記憶を取り戻し言った

「いくぜ、シズノ」

かつて、呼んだ名を再び聞いた。それだけで嬉しかった。

そして、私は彼と別れた。

願った。彼の元へ帰ると。

そこからは“私”の意志はない。

すべてを失った私。そんな私をみて彼はどのように思うだろうか？

たぶん、最初の私と似たようなものだろうと思う

ゼーガペイン if もう一度あなたに逢いたい

あの決戦から数年後。大半の人類は原体を取り戻し、本当の意味で人間の暮らしを始めた。

かつてのオケアノスは先の大戦で大破してしまった。今もその残骸は月にあるだろう。

今思うと何故新しい艦を建造したのだろうと思うがそれは置いておこう。

新しく建造されたオケアノスにはかつてのメンバーが乗りこんでいた。

彼もまた・・・再びガンナーとしてオケアノスに乗っていた。

そして、彼女も・・・

オケアノス 格納庫

オケアノス格納庫。そこにはゼーガペインが立ちすくんでいた。

一機は、アルティール。もう一機はガルダと呼ばれる機体だ。

そのアルティールの足元に一人の女性があり、ゼーガを見あげていた。

彼女の名は、ミサキ・シズノ。

前の名はイエル。

かつて、彼女はウィザードとして彼の愛した男。ソゴル・キョウと

共に戦場を駆けた。

しかし、最後の戦いにおいて彼女は記憶を失った。もともと、データだけの彼女だったが彼らと同じ原体になることができた。

それでも彼女の記憶は戻らなかった。

「君かい？俺の新しいパートナーは？」

「あ、はい。新しく配属されたウィザードの『ミサキ・シズノだろ？』え、はい」

「君のことはよく知っているよ。俺の名は『ソゴル・キョウ』さんですよ。ふ。そうだよ」

「ソゴルさん」は有名ですから

それもそのはずだろう。最初に原体になりそのあとディザレクシオン・システムを組み上げ今に至る。さらにはゼーガのパイロットとしても有名だ。

「そうか。あ、俺のことはキョウウでいい」

「あ、そうですか？じゃあ、“キョウウさん”で」

「まーいっか。よろしく。“シズノ”」

「はいー」

キョウはこれだけでも嬉しかった。こんな会話だけでも心から。最初は原体に戻れないと知った時はショックだった。けど、なれる知った彼は誰よりもそれを喜んだ。

そして、彼女は再びウィザードとなりこの場所へ戻ってきた。

ガルスオルムが脅威ではないこの時代。ゼーガはあまり必要でないし、パイロットも必要ではない。

しかし、最近再びガルスオルムの侵攻が一部変化があったことがわかり能力のある者は抜粋されたのだ。

キョウ自身もここに戻ってきたのはそれもあるが彼女と再会するためでもあった。

自分のことを好きだと言ってくれた彼女を置いてまで彼はシズノを愛していた。

二人は、ゼーガの乗り込むとキョウは色々と指導していた。

「本物は初めてか？」

「はい。今まではシュミレーターだったので・・・」

「どうした？」

「あ、なんだが初めて座った気がしなくて」

それもその筈だ。彼女は忘れているかもしれないがこのシートは彼

女のシートでもある。
共に、戦った証でもある。

「そうか。・・じゃあ、早速実戦モードでシミュレーションだな」

「はい！」

原体に戻った今では額にアイコンは表示されない。ただ、それではゼーガの性能を引き出せないためそれに近くなるシステムを開発した。それはゼーガをコンピューターとするならウィザードはキーボードに近いイメージだ。

それから数日。

キョウとシズノの訓練は続いた。

すでに、実戦レベル5をクリアしもう実戦に出ても問題ないレベルに到達していた。

先にも言った通り現在ではガルスオルムの数は数えるほどだ。

だから、そう簡単に実戦になるわけでもないがその極希に残存部隊と会敵する時がある。

その極希にキョウたちは出くわした。

「初めての实戦だけどそんなに緊張することはないさ」

「は、はい！」

かつての彼女とは思えないほど今の彼女の表情は明るく違う彼女の一面をみた。

『エンタングル!』

アルティールは量子転送され戦場へと舞い降りる。

戦闘に出ているのはアルティール一機のみである。これは、数の問題もあるがキヨウの申し出でもあった。

「シズノと戦いたい」それが彼の言った言葉だ。

現にシズノは緊張していた。初めての戦闘というのもあるかもしれない。

けど、本当はどこかで喜んでいたのだ。かつてのシズノの思いがそう思わせているのかもしれない。

「12時の方向、アンヴァール10、ウルヴォールフ4」

「楽勝だな」

「あまり調子に乗らないでください」

「ああ、わかってるさ。だが、今日はめでたい日だからな！盛大にいくぜえ！」

キヨウはゼーガを走らせる。そして、なにも言っていないのにシズノはホロニックランチャーを出した。

「ッ！」

的確に撃つキョウ。今のところは全弾外していない。

ppp!

ウルヴオールフが2機接近している。

キョウもすぐさま反応する。それと同時に、シズノはランチャーではなくブレードを出していた。

そして、的確に敵を落としていく二人。

キョウはこの時思った。やはり、彼女は彼女だと。

ウィッチと呼ばれるウィザードが存在する。それは簡単に言うならばガンナーと以心伝心。

しかし、シズノは今も昔もウィッチではない。

なら、何故こうも的確な動作を行えているのか。

それは、シュミレーターで、というのも含まれる。だが、もっと根本的なモノがある。

例え、記憶を失っても彼女は忘れていないのだ。

彼と共に戦った日々を。

だから、彼が撃ちたいと思った時にランチャーを。斬りたいと思った時にブレードを。

これはウィッチではなく長年共に戦い続けたパートナーだからできることだ。

「よし、これでラストオ……!」

最後の一機を仕留めようとしたその時!

pppp……!

「なに!?!」

「いつの間に?!」

一体どこに隠れていたのか。
一機のコブラルが背後に接近していたのだ。そして、コブラルから放たれた攻撃をもろにくらいアルティールは地上へと撃墜されたのだ。

「ん、ん……あれ……私」

「目が覚めたかい？」

「キョウさん！あれ、戦いは！？」

「ああ、最後の一機を仕留めよとしたら後ろから一発」

「ごめんなさい。私がつとしつかりしていれば」

「謝るなよ。俺も迂闊だった。だから、自分を責めるのはやめだ」

「はい」

二人は今、ゼーガのコックピットにいる。かつてはデータだったから多少の破損はあった。

しかし、今は原体。例え、コックピット内でも衝撃は受ける。現に、よく落とされて無事でいれたのが奇跡だった。

キョウは中にも仕方がないと言い、彼女を連れて外に出た。

彼は思い出していた。前にもこういうことがあったと。

あの時は、彼女から過去の自分を教えて貰った。

だからなのだろうか。彼もまた彼女と同じことをし始めた。

「前にも、君とこういうことがあったよ」

「え？」

「敵の罠に引っ掛かって仲間と逸れて、今のような状況になったん

だ
」

「・・・私が、ですか？」

「ああ。“前の”君とね」

「前の私？」

「そう」

キヨウは語る。前のシズノがどういう人間だったか。彼女を先輩と呼び、水泳部のPVに出てくれる？と頼んだり、一緒に戦い、現実を知り、痛みを知り。そして、最後は・・・

それは聞いてシズノは・・・

「待って、私も一緒に！」

「私と戦ってくれる？」

「これが現実」

「キヨウ・・・」

「イエル・・・それが私」

「ミサキ・・・シズノ？」

「キヨウ！」

「あなたの敗北は舞浜サーバーの死を意味するわ！そして、あなたも！」

「私は・・・帰るんだ！キヨウの・・・キヨウの所へ！」

次々と頭に出てくるビジョン。
それは私。彼はキヨウ。

ガガガガ

「？」

キヨウは変な音を聞き取りその方へ向いた。
すると何故、今まで気づかなかつたのかウルヴオールフがいた。いや、機能を停止していたはずの機体が再起動したのだ。

「あの時と同じかよ！？」

そう、あの時もそうだった。こんな話をして、けど、あの時は助けに来てくれて。
だが、今回もそういうことが起こるとは限らない。

だから、キョウは覚悟した。
死を

同じく、シズノは恐怖していなかった。
いや、感じていなかった。

シズノ

先輩

シズノ

彼が私の名を呼ぶ。
それは、すべて彼であり彼とは違う存在。

キョウ、愛していたわ

俺もさ

でも、今でも、目の前にいるあなたを、私は
！！！！

ウルヴオールフの砲門が光集まる。

キョウは覚悟するが、シズノは彼の名を叫ぶ。
そして、それに反応してゼーガ動くのと光が放たれたのは同時だった。

「キョウ”!!!」

ドオオオン!!!」

二人は、生きている。ゼーガ盾となり二人を守る。

「シズノ・・・？」

そして、ゼーガを遠隔操作し敵を倒す。

しかし、キョウはそれどころではなかった。

「キョウ！」

シズノは彼に抱きつく。彼もまた、彼女の名を呼び抱きしめる

「シズノ！記憶が・・・戻ったんだ・・・」

「ええ、あなたの・・・おかげよ・・・」

「シズノ・・・」

「逢いたかった。例え、記憶を失ってもあなたに逢いたかった。愛していた！」

「俺もだ・・・俺も愛している」

二人はいつも引き離され、すれ違ってばかりだった

けど、もうそんなことは起きない

二人はもう互いの手を離さない

だから、二人はずっと一緒

そんな二人を月とアルティールが静かに見守っていたのだった

(後書き)

よくゼ ガは6話からといますがその通りだと思えます。

5話まではキヨウの視点?を描いているそうです。

隠れた名作などとも言われてもいますがこれだけ ガをみてくれる
きかけとなれば幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7567p/>

ゼ ガペイン if もう一度あなたに逢いたい

2010年12月30日23時17分発行